

序文

『フリーダム・ドリームス』は、わたしにとって一種の分岐点である。人生の半分以上を費やして、わたしは世界を変えようとした人びとについて書いてきたが、それはもっぱらわたしも世界を変えたいとおもっていたからだ。社会運動の歴史がわたしを魅了するのは、それがわたしたちの現状と、未来をいかに作り上げていくかについて、何かを教えてくれるかもしれないからである。わたしが二〇年近く前に最初にこの仕事にとりかかったとき、政治状況はもっとはっきりしたもののみえた。つまりわたしたちに必要だったのは、反人種主義と反性差別主義に関与する革命的な社会主義者の運動だった。若気の至りから、わたしはそれがまったくわかりきったことであると、そのときはおもっていた。時間の経過とともに、わたし自身の政治的経験と諸著作のテーマが、物事は見かけどおりではないこと、そして変化のために闘う人びとの欲望、希望、意図は、そう簡単に分類したり、割り切ったり、説明したりはできないことを教えてくれた。不幸なことに、社会運動を評価するときの基準は、その運動が描き出す未来像それ自体の真価や力に求められるよりもむしろ、たいいてい、それらの未来像がうまく達成されたかどうかをめぐって揺れ動いている。そのような尺度からみれば、実質的にはほとんどのラディカルな

運動が失敗だった。なぜならそれらが変えようとした基本的な権力関係はいまほとんど手つかずのままだからである。けれども、新しい世代を鼓舞して変化のための闘争を続けさせるものは、ほかでもない。これらが提示するありえたかもしれない未来像と夢なのである。

ジュディス・バイフィールド教授と、「均等機会とアフアーマティブ・アクションに関するダートマス事務局」局長のオジー・ハリス氏から、二〇〇〇年一月のダートマス大学におけるマーティン・ルーサー・キング牧師についての講演の依頼があったとき、すでにわたしはこのような問題について考えていた。わたしはとくに、旧態依然とした抗議の政治に疎外感を感じていたので、キングの遺産と未来像を考え直すこの機会が、いろいろな意味で、これらの問題の多くを表面化した。そもそも、わたしたちの多くをラディカルな運動へと駆り立てた、あの解放の夢はどうなったのか？ わたしたちが想像したとおりの社会主義にながおこったのか？ 新しい社会を建設するという夢、すなわち新しいエデンの園にながおこったのか？ そして政治のなかの希望や愛はどうなってしまったのか？ わたしの講演は、これらの疑問に関して重ねた考察からなっており、これが結果として『フリーダム・ドリームス』となった。

キング牧師はしきりに、「愛する力」なしに真の解放運動を築くことなどできるはずがないと、戒めていた。同名のタイトルを冠した一九六三年の本のなかで、彼は次のように書いている。

われわれ黒人は長い間、自由を夢みてきたが、なおも差別および隔離という抑圧的な牢獄に閉じこめられている。われわれは冷酷な、ひねくれた態度でこれに応えるべきなのだろうか。決して、そうではない。そんなことをすればわれわれの人格を破壊し、毒してしまうだろう。……われわれは冷酷さ

から身を守るために、この世代のきびしい試練の中に、われわれ自身とアメリカ社会の両方を変革する機会を見て取る必要がある。われわれの現在の苦しみと、自由になるための非暴力の闘争は、西欧文明が存続するために極めて必要とされているような霊的原動力を与えるだろうということは十分考えられる⁽¹⁾。

キングの言葉は、わたしの講演にとつて、いや実際のところは、その時以来わたしがずっと考えていたことすべてにとつて、一種の雛形となった。目前にある厳しい試練の先を見通すことができるような未来像を、いかにしてつくりだすのか？ とくにこの酷い時代に、どうしたら苦痛とシニシズムを乗り越え、愛と希望と、そしてすべてを包み込む自由の夢を抱くことができるのか？

まったく酷い時代だ。わたしはワールドトレードセンターが崩れ落ちた日——『フリーダム・ドリームス』に最後の仕上げをから目撃した身の毛のよだつような出来事だった——、『フリーダム・ドリームス』に最後の仕上げを施していた。そしてこの草稿を編集者へと送ったとき、爆弾がアフガニスタンの人びとのうえに降り注ぎ、大量破壊兵器によって、でなければ飢餓によって、計り知れない数の罪なき人びとが次々に死んでいた。暴力はさらなる暴力を生み出すだけだろう。大量虐殺はちょうど始まったばかりだった。以前にもましていまこそ、わたしたちには、愛し、夢を見る力が必要なのだ。条件反射的に旗を振って、「国益」の名の下にあらゆる抑圧行動に服従するのではなく、この国家はキングの未来像に関心を払わなければいけないし、彼の極めて豊かな思想の源となった運動からヒントを得なければいけない。公民権運

(1) マーティン・ルーサー・キング『汝の敵を愛せよ』蓮見博昭訳、新教出版社、一九八九年、一五五—一五六頁。

動はすべての人のために自由を求めていたし、愛と道徳的説得をとおして勝利を得なければならぬことを信じていた。非暴力の哲学に傾倒した人びとは、自分たちの受難を贖罪的なものとみなした。キング牧師によれば、この運動のまさに核心であった南部の驚くべき黒人たちは、警察犬と放水銃と白人暴徒の前に毅然と立ち、彼らの敵を愛するためにできる限り懸命に自分のやるべきことに従事することで、この魂なき国家の魂となる覚悟をしていたのだ。もしあの魂が勝利を手にしていたら、もし自由についての運動の未来像がこの国家の政治文化をすっぽり包み込むことになっていたらと想像してみよう。もしそうなら、グローバルな資本主義下で現代生活の特徴をなすようになってきた蔓延する消費主義と物質主義、そして剥き出しの不平等が自由を意味するなどということはありえなかっただろう。しかしこんにちにあつて自由は、事実上、自由企業と同義なのだ。

このように言うと、おそらくわたしは裏切り者扱いされるだろう。しかしわたしたちはまだ完全に自由ではないのだ。アメリカの民主主義はいつもすべてのひとを包含してきたわけではない。奴隷制と「インディアン戦争」から二〇〇〇年の大統領選までの長い歴史がそのことを証明している。確かに、周縁の排除された者たちは、アメリカで民主主義がうまくいくよう最善を尽くしてきた。そしてこれから描いていくラディカルな運動のなかには、解放リベレーションの名の下に、またしばしば目的が手段を正当化するという前提の下に、身の毛もよだつようなことをおこなったものもある。共産党員、ブラック・ナシヨナリスト、第三世界の解放運動——これらはすべて、未来はいかにありうるかということに関する刺激的で先見的でさえある見取り図を残してくれたが、これらはまた、行動あるいは沈黙をとおして、ずっと、暴力や抑圧という行為と共犯関係にある。完全に汚れていない手などないのだ。

だが、わたしたちがいかに抑圧的であつたかについてだから述べたり、あるいはラディカルな運動

の恥すべき行為を単に列挙したりする本を別に書くことが有益なことだとはとてもおもえない。わたしは『フリーダム・ドリームス』を、さまざまな思想——主には周縁化された黒人活動家によつて創り出された未来像であるが、彼らは苦境から抜け出る別の進路を指し示してくれた——を回復させるための予備的作業として構想した。新しい運動の拠りどころとなるものとして、これらの思想や戦略のすべてを受け入れよなどと言うつもりはない。そうではなく、要するにいいたいのは、わたしたちはわたしたち自身の集団的な想像力の泉から水を汲み上げなければならないし、先の世代がしたように、夢を描き出さなければならない、ということなのだ。

詩人ジェイン・コルテスが言う「どこでもないところに先立つてあるどこか」を心に描き出そうとすることは極めて困難な仕事であるが、非常に緊急を要する課題なのだ。新しい未来像なしには、なにを築き、なにを解体すべきなのがわからない。混乱し、方向が定まらず、シニカルになり果てるというだけではなく、次のことを忘れてしまう。革命を起こすことは、一連の巧妙な手段と戦術なのではなく、わたしたちを変革させる、そして変革させなければならないひとつのプロセスなのだとすることを。

「歴史が眠るとき」——はじまり

歴史は眠るとき夢で語る。眠っている町の額で死は血の星座となる⁽¹⁾…
オクタヴィオ・パス「詩に向かつて」

母には、夢を見ながらそれを大声で言う癖がある。それは彼女の朝の日課である瞑想と関係があるのだとおもう。寝室の真つ暗闇のなかで、彼女の第三の目は、新しい世界のうえに、つまり彼女の精神状態と同じくらいに平穏な、光に満ちた美しい場所へと注がれている。彼女には、内面の平穏を表現するのに、一言も言葉を発する必要がない。朝日のように、それは彼女の前にいるすべての人に向かって放たれるのだ。母はこのことを知っていた。だから彼女はこの二〇年、アナンダ Ananda (「至福」)と名乗ったのだ。そして他の二つの目のおかげで、彼女は、私たちがどこで生きていたかを忘れない。おまわり、ヤクの売人、ソーシャル・ワーカー、錆びた生水、ゴキブリにネズミ、小便の臭いのする玄関、山積みのゴミ、こういったことがたえまなく思い出させるのは、わたしたちの世界が、アムステルダム通りと一五七丁目界限にある、ハーレムやワシントン・ハイツのボロボロの安アパートで始まり、終わる、ということだった。

ミューン社会、わたしたちが土地を所有し、富を分かち合い、白人には目もくれず気にも留めないといった世界、そういう理想的な夢に溢れたものであった。それはわたしが植民地以前の 아프리카 として想像したものだ。たしかにわたしはまだ一〇代で、ナイーフだったが、シエク・アンタ・ジョップ⁽²⁾、チャンセラー・ウィリアムズ、ジュリウス・ニエレレ、クワメ・エンクルマ、クワメ・トウレ⁽⁶⁾らの著作に着想をえた想像のポートルートのおかげで、ポストコロニアルのアフリカがどのようなものでありうるかということについて希望と可能性を感じる事ができたのである。

古い過去が、考えていたほど輝かしくも、平穏でも、コミューン的でもなかったことはすぐにわかった——わたしたち「黒人」がアメリカスに「奴隷として」連れてこられたときに経験したこととくらべてみれば何百倍もマシだったとおも信じてはいたけれど。かつての植民地——モブツのザイルであるろうと、アミンのウガンダであろうと、はたまたフォーブス・バーナムのガイアナであろうと——からの報道は、本当の自由を実現するのに必要とされるものについてわたしが期待したほとんどのものを打ち砕いた。アフリカ南部、エルサルヴァドルやニカラグア、キューバやグレナダでの出来事に影響されたほかのすべての新参者の革命家たちと同じく、大学でわたしは、闘争状況から生まれてきた自由にかんする異なった未来像を発見しようという希望を抱いて、第三世界の解放運動と解放後の社会について研究した。ポルトガルのアフリカ植民地に独立戦争中できた「解放区」のなかに、グレナダでモーリス・ビショップが率いた「ニュー・ジュエル運動」⁽⁷⁾のなかに、ガイアナにあった悲劇的に短命だった一九世紀の共同村のなかに、コンゴのブラザビルでストライキ中の労働者がほんのつかの間国家権力を握りアフリカで最初の労働者国家を建設する準備をしていた短い瞬間のなかに、わたしは新しい社会のすかな光を探し出そうとしたが、それは結局無駄だった。なるほど確かにこれらの運動はすべて岩壁に

ぶち当たって粉々に砕け散り、国内および国外のさまざまな勢力のせいで破綻したが、しかし少なくとも

- (2) Cheikh Anta Diop (一九三二—一九八六) セネガル人歴史家、エジプト学者。
- (3) Chancellor James Williams (一八九八—一九九二) アメリカの黒人の歴史家。ハーワード大学の元歴史学教授。父親は奴隷だった。黒人大学の名門ハーワード大学で教育学の学士号、歴史学の修士号を取得し、歴史学と社会学の博士号をワシントンDCのアメリカ大学で取得した。一九七〇年代半ば全旨となる。一九七一年『黒人文明の破壊——紀元前四五〇〇年から西暦二〇〇〇年までの人種の壮大な問題』を上梓。一九七二年に黒人人文アカデミー (the Black Academy of Arts and Letters) より賞を与えられ、彼の影響を受けていない学者はいないといわれるほどの偉大な業績となった。
- (4) Julius Kambarage Nyerere (一九二二—一九九九) アフリカ東部にあったドイツ植民地、後に英国植民地のタンガニカ (現タンザニア) で生まれた政治家。イギリスのエジンバラ大学へ学士号取得のため留学し、社会主義とアフリカの集合的生活の繋がりについて独特なヴィジョンを発展させた。帰国後、一九五四年にタンガニカ・アフリカ全国組合 (the Tanganyika African National Union) を結成、委員長となる。植民地地下で自治を承認されたタンガニカの首相、独立後は初代タンザニア大統領 (一九六四—一九八五) に選出された。
- (5) Kwame Nkrumah (一九〇九—一九七二) ガーナの初代首相、および後の大統領。アメリカ、英国に留学後、一九四五年に汎アフリカ会議を組織化。アフリカ独立革命に多大なる貢献をした。
- (6) Kwame Ninsin (一九四一—一九九八) アメリカの黒人活動家。ストークリー・カーマイケル (Stokely Carmichael) から一九七八年に名前を変えた。ハーワード大学卒業後、アラバマ州ラウンデス郡で「ラウンデス郡自由組織」をつくって有権者登録運動に従事し、また学生非暴力調整委員会 (SNCC) の委員長となり、シットインなど南部において戦闘的な直接行動をおこなった。一九六六年にキング牧師も参加した、南部公民権運動の最後の大規模なデモ行進がおこなわれたミシシッピ州グリーンウッドで「ブラック・パワー」というスローガンを叫び、一躍時の人となり、一時ブラック・パンサー党の一員だったこともある。

も、自分たちの世界はこうあってほしいとおもうようなある種の未来像を、たとえどんなに断片的で不完全なものであったとしても、残してくれたのだ。

レーガン時代の初期に活躍していた多くの仲間と同様に、わたしは、第三世界に行き着いたのと同じ理由でマルクス主義へと向かっていった。プロレタリアート（リンペンや何か）の窮乏は、革命の約束とくらべてみればさしておもしろくもなく、切迫してもいかなかった。わたしが「小文字のc」ではじまる共産主義に魅了されたのは、理論的には、それが、人間の要求を解決するためにテクノロジーを利用し、仕事を減らして余暇を増やし、さらには生存に欠かせない基本的なものに困ることなく創造し、発明し、探求し、愛し、くつろぎ、人生を謳歌できるようわれわれすべてを自由にしようとしていたからだ。姉のマカニとわたしは、貨幣の目的について、貧困と私有財産と国家の消滅について、また人種主義と家父長制の物質的根拠の破壊について、ほかの人によく説教をしたものだ。わたしは、『ドイツ・イデオロギー』と『共産党宣言』の若きマルクスに、ありとあらゆる搾取機構の廃絶を予言した先見性のあるマルクスに恋をした。若きマルクスのあとは、イギリス人歴史家の故エドワード・トムスンを経由し、資本主義的生産と合理化のすべての痕跡と手を切りたがっていたウィリアム・モリスのような空想的で反逆的な社会主義者へと行き着いた。モリスは、社会主義の有効性にはあまり関心がなく、社会関係の変容や、トムスンが言ったような「協働の倫理、愛の活力」に立脚した、新しく、自由で、民主的な共同体の構築のほうに関心があった。

愛と想像力の活力が強力な社会的な力として理解され重んじられるような政治的空間は、現代においてほとんどない。社会主義者は、空想的であろうと科学的であろうと、これについてはほとんど何も言わなかった。それゆえに、自由についての、より入念で完全な夢を探し求めたわたしは、もつと想像的

な方向転換をせざるをえなくなった。フランクリン・ローズモンとペネロペ・ローズモン⁽⁸⁾、テッド・ジョーンズ⁽⁹⁾、ローラ・コルシグリア⁽¹⁰⁾、ジェイン・コルテスとの多くのすばらしい偶然の出会いのおかげで、わたしはシュルレアリスムを発見した。だがそれは、第一次世界大戦後のパリに出現したシュルレアリスム運動の、アンドレ・ブルトンやルイ・アラゴンなどの指導者の著作や活動においてではない。目の前に、アフロディアスポラ文化の豊穡で黒い土壌のなかに埋もれていたのを発見したのだ。わ

(7) New Jewel Movement 一九七九年から一九八三年までグレナダ首相を務めたモーリス・ビショップ (Maurice Rupert Bishop 一九四四—一九八三) が一九七三年に、もともとあった「福祉、教育、解放のための共同事業 (Joint Endeavor for Welfare, Education, and Liberation)」を刷新して結成した反体制制の政治組織。この運動は当時の独裁的なゲイリー政権を打倒し、NJMが「グレナダ・キューバ親交協会」を設立したことにみられるように、新キューバ政権の樹立へと繋がった。ちなみに一九八三年のクーデターによりビショップは処刑され、この混乱に乗じた合衆国のグレナダ侵攻により親米政権が発足した。

(8) Penelope (一九四二—) and Franklin Rosemont (一九四三—) アンドレ・ブルトンの影響を受け、一九六六年、シカゴをベースにした国際的なシュルレアリスト運動をおこなうシカゴ・シュルレアリスト・グループをつくった。元DSのメンバーやアナキストからなる。

(9) Ted (Theodore) Joans (一九二八—二〇〇三) アメリカの黒人詩人、アーティスト、トランペット奏者。ジャック・ケルアック、アレン・ギンズバークといったビート・ジェネレーションとの親交がかなり深く、またアンドレ・ブルトンは彼をシュルレアリストとして賛美していた。彼の詩はジャズのリズムに大きな影響を受けているといわれる。

(10) Laura Corstiglia インディペンデントに活躍する芸術家。

(11) Jayne Cortez (一九三六—) アメリカの黒人女性で、詩人、ミュージシャンでもある。

たしはそのなかに、生まれた日付もなく、有効期限もなく、トレードマークもない、きわめて奇跡的な武器を発見した。わたしは、マルーン社会やシャーマニズム的予言といった過去の実践を手始めに、ヨーロッパの植民地本国、北アメリカのブルース・ピープル⁽¹³⁾、エメ・セゼールやシユザンヌ・セゼールやヴィフレド・ラムのような人たちを生み出した、植民地化ないしは半植民地化された世界にいたるまで、〈不可思議なもの〉のあとを辿った。シュルレアリストたちは、自由へ向かうどんな真剣な衝動もまずは心のなかで始まるべきだということを教えてくれただけでなく、新しい世界についての、わたしが知っているなかでもっとも想像的で、包括的で、陽気な夢を与えてくれた。一般に信じられていることとは反対に、シュルレアリスムは、美学の教義などではなくて思考の解放にかかわる国際的な革命運動なのである。シカゴ・シュルレアリスト・グループによれば、

シュルレアリスムとは、自由、反乱、想像力、愛の高揚である。……その基本的な目的は、日常生活と途方もない夢の間にある矛盾を減じ、最終的には完全に解消しようとすることである。その名の通り転覆的なシュルレアリスムの思想と行動が意図しているのは、抑圧の力をはねつけ破壊することではなく、欲望を解放し、新しい詩的な武器で武装することである。想像力の奴隷化の廃止から、シュルレアリスムは、だれもが詩人になりうるような自由社会の創造へすすむ——だれもが完全に、そして自由に、彼あるいは彼女の潜在力を発展させうる社会の創造へと。

たとえばマドリッドのシュルレアリスト・グループのメンバーは、自分たちの作品を、文学作品としてよりむしろ生へのひとつの介入とみなしている。それは、「疑念、恐怖、怒りを、好奇心、予期せぬ出来事、欲望」へと転換することを目的とする、ありとあらゆる形態の抑圧に挑む長期的な戦いであり、「集合的な生活のための模範的空間——分離や孤立が永遠にとり除かれる空間」である。

シュルレアリストたちは社会の完全な変容について語っているが、それはただ、不当に傷つけられた人びとに、より強大な政治的、経済的権力を授けるといったことではない。新しい社会関係、新しい生活と交流の様式、仕事や娯楽やコミュニティへの新しい態度を、彼らは話題にしているのだ。この点で彼らは、みずからの革命的未來像を社会生活のあらゆる側面にまでひろげたラディカル・フェミニストたちと多くのことを共有している。ラディカル・フェミニストが教えてくれたのは、ジェンダー役割、男性支配、権力の座にある代表者の男性比率の高さ、衝突を解消する手段として暴力に訴える男性の傾向といったことが、自然なことでも不可避なことでもなんでもないということだった。とりわけ有色のラディカル・フェミニストたちは、人種、ジェンダー、階級が、社会の大半を服従させていくことと連

(12) Maroon アメリカスに存在した、逃亡奴隷のつくった共同体。

(13) Blues People リロイ・ジョーンズの同名のブック・ミュージック論『ブルース・ピープル』からきている。『ブルース・ピープル』において「ブルース・ピープル」とは、「ラルフ・エリスンの言い方を借りれば「おのれの民族的経験を受け入れ、それに寄り添って生きた人々」とされている（飯野友幸訳、音楽之友社、二〇〇四年、二二五頁）。

(14) Aine Cesaire (一九三二—二〇〇八) 仏領マルティニクの黒人詩人。

(15) Wifredo Lam (一九〇二—一九八二) アフリカキューバ人の母親と中国系の父親から生まれ、キューバで育ったシュルレアリスムの画家。第一次世界大戦前、パリのシュルレアリスムやピカソの影響を強く受ける一方、エメ・セゼールとも親交があった。彼の作品はヨーロッパとブードゥー教などの西インド諸島独特の世界観とを融合させたものとなっている。

携しながらいかにして作用するかをあきらかにしつつ、普遍的シスターフッドなる安易な思想や、男性を普遍的な敵だとみなす生物学的議論を込み入ったものにした。わたしの注意を引いたほかのすべての運動と同じく、ラディカル・フェミニズムはもちろん、さらにレズビアンやゲイ・ムーブメントから立ち現われてきた思想は、たんに家父長制を批判しているからだけでなく、それらの自由の夢ゆえに魅力的なものである。全体としてみると、こういった運動は、何が「正常」であるかを問いただし、国家と公認の文化が、セクシュアリティ、ジェンダー役割、社会関係にたいするわたしたちの姿勢をいかにして監視しているかを示し、欲望に根ざした政治を構築するよう勇気づけてくれる。

このそれぞれの運動に関わった黒人知識人たちがただべつの未来を想像したというだけでなく、多くの場合、彼らの解放の未来像は、「白人」同胞たちが示したもののよりもいっそうラディカルで包括的なものだった*。じつにわたしが本書をつうじて論じているのは、これら反逆の黒人知識人／活動家／アーティストたちは、共産主義、シュルレアリスム、ラディカル・フェミニズムに挑戦しそれらを作り変えただけでなく、そうすることにより、それらの運動を新しい方向へと突き動かしたといっても過言ではないすぐれた理論的洞察を生産した、ということだ。しかしながらたいいの場合、黒人ラディカルたちの決定的な未来像は、完全に周縁化されなかったにしても、窮地に立たされた。もちろん、それらの夢を実現すべく闘争を続ける人びとはまだ多く存在している——戦いが続くあいだにも、その未来像を拡張し、入念にし、精緻にしている。この本は、そういった自由の夢についてのものである。それは二〇世紀の黒人のラディカルな想像力の歴史を短く、そして独特のやり方で素描しただけのものだ。運動史や思想史に匹敵するようなものを書いたなどというつもりはないし、これら革命の夢がなぜ成功しなかったのか（未だに―）を説明することにも興味はない。むしろ、わたしはただ、自らを反逆者と称す

るものたちが革命後の生を想像したさまざまな方法をあきらかにし、どこからこうした思想が来たかをあきらかにしたいのだ。『フリーダム・ドリームス』は回顧録ではないが、きわめて個人的な本である。これはわたし自身の政治的探求をめぐって、つまりわたしがかつて共有し、かついまだ共有している夢をめぐってざっと整理したものだ——それは、アフリカのユートピアの夢から、想像力が生み出す超現実的世界にまで、あらゆる搾取の形態を廃絶しようという共産党とフェミニストの夢から、奴隷制とジムクロウの⁽¹⁶⁾つけを払ってもらおうという四〇〇年来の夢にまでいたる。

*わたしは、新しい社会にかんする黒人の、夢に興味がある、ということ強調しておきたい。ウィリアム・H・ピースとジェイン・ピースによる興味深い著書『ブラック・ユートピア——アメリカにおける黒人の^{ニッロ}コミュニティの実験』は、白人の奴隷廃止論者と自由主義者が黒人コミュニティを構想したこと、およびそのコミュニティの主目的は「完全な自由のために黒人を訓練する」（一九頁）ことであったということについて考察している。自由はジェファソンの価値観によって定義されており、当然それらの黒人村を設計した白人によって規定されていた。ほとんどのコミュニティの社会が社会主義や共産主義を志向したものであった一方、黒人のために作られたそれらの居住地は、事業、儉約、個人的蓄財を中心に据えていた——

(16) Jim Crow 奴隷制廃止後も黒人を隷属状態に留めておくために講じられた人種隔離の諸制度を指す呼称。「ジムクロウ」という言葉については、体の不自由な黒人が「ジャンピング・ジム・クロウ」を歌い踊っている姿を自分の芸に取り入れた芸人トーマス・ライスの minstrel ショー（白人が、黒人に扮装し、黒人であることがわかる特徴を真似して）たとえ不正確であっても、笑いのにした）が起源であると言われているが、はつきりとはわかっていない。

換言すれば、それらの目的は、元奴隷たちに、メインストリームの生産的な一員となる準備をさせようと、中産階級の資本主義的価値観を教え込むことだったのだ。彼らの研究においては、黒人は主として白人の自由主義イデオロギーの客体でしかなく、彼ら自身の自由のヴィジョンを追求する行為主体ではないのである。

この本を書くことの目的は、わたしたちがいかなる世界を目指して闘っているのかについてのきわめて昔からある対話をふたたび始めることにある。夢を見るという任務に興味があるのはわたしだけではない——言うまでもなく、いままさにこういつた対話をおこなっている活動家や思想家はたくさんいる。ほんの少しの名をあげるだけでも、わたしの姉のマカニ・テムバニクソン、コーネル・ウエスト、ライアン・マンとエリック・マンから、クリープランドにいるノーマ・ジャン・フリーマンとドン・フリーマン、ニューアークにいるアニマ・バラカとアミリ・バラカ⁽¹⁸⁾、そしてデトロイトのグレイス・リー・ボグズ⁽¹⁹⁾といった人々がいる。ここ何十年も、こういつた人びとと他の仲間たちは、革命と新しい社会の夢について忌憚なく勇氣を持って語ってきたし、ときには、集団行動、個人々の自己変革、そして意思により何が可能となるのかを共同体が想像できるようにする文化作品を創造してきた。

わたしはこの本を、正統性や党派主義と引きかえに自分たちの夢を売り渡してきた伝統的左翼のために書いたのではない。残念ながら、こういつた人のほとんどには、希望はない。そして彼らはいの一番にこの本を、ユートピア的で、理想主義的で、非現実的だ⁽²⁰⁾といって退けるだろう。それよりもわたしは、この本を、なおも夢見ることのできるくらいに大胆な人びとのために書いた。とりわけ、批評家ヘンリー・ジルーが鋭い洞察力をもって「シニシズムの文化」と呼ぶものなかで育った若者たち——そ

の夢が市場にすつかり取り込まれている若者たちのために書いたのだ。あまりに多くの若者たちが、「給料をもらって」⁽²¹⁾きらびやかな暮らしをいとなむことが黒人解放運動の目標であると信じ込んでいるような世界では、徹底的に民主的な公的文化の建設について議論する余地すらほとんどない。あまりに多くの若者たちが、これこそができる最善のことだと実際に信じている。しかしながら、一九九九年のシアトルで始まった反グローバリゼーションの示威行動には、若い顔ぶれが群れをなしてどんどんと現われてきていたし、大学生の反搾取工場運動「ノー・スウェット」の成功の大部分は、急進化した学生たちの増加に拠るところが大きいのである。一九九七年に発足した「黒人急進派会議」(Black Radical Congress: BRC)⁽²⁰⁾には二五歳以下の何百人もの活動家が結集したし、ムミア・アブ・ジャマルの釈放運

(17) Cornel West (一九五三—) 黒人の宗教活動家、政治学者、哲学者。プリンストン大学教授。アメリカの民主主義と人種の問題について多くの著作を著している。日本語で読めるものに、『人種の問題——アメリカ民主主義の危機と再生』(山下慶親訳、新教出版社、二〇〇八年)がある。

(18) Anni Inamu Baraka (一九三四—) 黒人詩人、作家、批評家。六〇年代にはブラック・パワー運動や汎アフリカ主義など、政治的活動にも関わるが、ビートジェネレーションとの関わりも深く、詩作、劇団活動も活発で、その卓越したブラック・ミュージック論など日本語にも多く翻訳されている。六六年、それ以前の結婚相手だったユダヤ系白人の女性と別れ、黒人女性のシルヴィア・ロビンソン(後にアミニ・バラカと改名)と結婚、さらに六七年イスラム教改宗後にロイ・ジョーンズ (LeRoi Jones) から改名した。

(19) Grace Lee Boggs (一九一五—) 中国人移民の両親を持つロードアイランド生まれの中国系アメリカ人活動家。「労働者党」入党し、一九四〇年代よりシカゴの黒人コミュニティで借家人の権利獲得運動などを展開。一九五三年に黒人の自動車工場労働者で活動家のジェイムズ・ボグズと結婚し、デトロイトで活動家として活躍している。

動もそうであった。だから希望はあるのだ。

それでも疑問が残る。こんにちの若い活動家たちはなにを夢見ているのだろうか？ 彼らがなにに反対して闘っているかはわかる。だが何をめざして闘っているのか？ これは重大な問題だ。というのも、この本の基本的前提の一つは、新しい社会についての力強く先見性のある夢が生まれてくるのは、お利口な人たちのちよっとした知的な集いではないし、現状に怒り狂うことがたんなる流行りとなった断片的で個人主義的な消費資本主義の世界でもない、ということだからだ。革命的な夢は政治への関与から芽生えてくる。集合的な社会運動は、新しい知の培養器なのだ。こんなことはわかりきったことのようにおもえるかもしれないが、わたしのまわりには、活動家になりたいと思っただけでもそうした知的な仕事ができなくなりはいかないかと不安をおぼえる善意に溢れた学生たちがますます増加している。彼らはしばしば二つを区別し、活動と知的職業をそもそも両立しえないものとみなしてしまふ。「現実」世界について、彼らは、暴力と絶望にみちた実在の荒野であると述べ、大学については、現実に生きている人びとの生活と闘争から遠く離れた、毒を抜かれた聖域のようなものとして語っている。もうひとつ極端な例をあげると、わたしは学生に、「現実の人びと」がこんにち直面している問題は、わたしたちの秀でた知識と、そのような知識にまったくアクセスすることができないアイビリーグの壁の外にいる人びとの亀裂をただ橋渡しするだけで解決可能であるとか高説賜ったことがある。知らず知らずのうちに、人種全体の向上という「才能ある一〇分の一」イデオロギー⁽²¹⁾のようなもの擁護者となっている彼らが表明している目標は、もっと「わかりやすい」知識を携えて「人びとの」とへいく⁽²²⁾こと、みずからを解放するのに同胞たちが必要とする情報を仲間たちに戻してやる、ということである。若者が知の政治的意味を学び認識することで興奮しているのを見るのは励みになるとはい

え、ただ人びとのうえに「科学的知識をたらしめてやる」だけで新しい解放の社会運動が生まれてくると彼らが信じていることには、やきもきせざるをえない。

わたしはその反対が真実であると確信している。社会運動のほうだが、新しい知、新しい理論、新しい問いを生み出すのだ。たいていのラディカルな思想はだいたい、抑圧システムに直面して憤る人びとの問題に、具体的かつ知的に関わることから生まれてくる。たとえば、学問的な人種研究はつねに、政治的闘争と密接に絡み合ってきた。ちょうど帝国主義と植民地主義と再建期の贖罪の政治⁽²³⁾が社会ダーウィニズムとそのほかの科学的人種主義の出現のための知的根柢を作り出したように、人種主義に抗う⁽²⁴⁾闘争は文化相対主義と社会構築主義的な人種論を生み出した。W・E・B・デュボイス⁽²⁵⁾、フランツ・ポアズ⁽²⁶⁾、オリバー・コックス⁽²⁶⁾をはじめさらに多くの人々たちによる偉大な業績はつねに、社会運動だけであ

(20) Mumia Abu-Jamal (一九五四―) 元DJでブラック・パンサー党員でもあったが、一九七〇年代にフィラデルフィアで警官殺害嫌疑により死刑判決を受け、冤罪の可能性が濃厚であるにもかかわらず、現在も拘束中である。

(21) “talented tenth.” W・E・B・デュボイスが若いころ主張した理論。教育を受け、才能ある、選ばれた「一〇人に一人」のエリートが、人種全体を向上させるべく、指導者として社会変革に直接かかわったり、教師として教育に携わったりすべきという主張。

(22) 南北戦争後の一八六五年から一八七七年の期間を指す。この時期、解放黒人局という連邦機関が設置され、それは、奴隷解放後の南部社会の奴隷労働制から自由労働への移行と、解放された黒人たちの法的権利の保護と保障や教育活動の援助をおこない、南部の再建に尽力した。しかし本書の四章で詳しく論じられるように、またその後約一〇〇年間の黒人の合衆国における法的、政治的、経済的位置をみれば一目瞭然であるように、黒人にとっては挫折の時期であったと捉えられる。

く、リンチの激増やファシズムの台頭のような社会的危機によってつくりだされた。同じくジェンダー分析は、ただグリムケ姉妹やアナ・ジュリア・クーパー、シモーヌ・ド・ボーヴォワールやオードリー・ロードといった非凡なる個人によってではなく、フェミニスト運動によってもたらされた。ジェンダーと変化の可能性についての思想は、大半が社会闘争と結びつきながら発展したのである。

進歩的社会運動が抑圧についての統計や数々の抑圧の物語を生み出すことなど断じてない。むしろ最高の社会運動は、偉大な詩がいつもするようなことをする。つまり、わたしたちをどこかほかの場所へとつれていき、恐怖を追体験することを強い、もつと重要なことには、新しい社会を想像するのを可能にするのだ。覚えておかなければならないのは、諸々の状況と社会運動の存在そのもののおかげで、参加者たちは何か別のものを想像することができるし、物事がいつもこんな風でなくてもいいということに気づくことができる。そう、あの想像力、現在において未来を見ようとするあの奮闘、これを「詩」と、あるいは「詩的認識」と呼ぼう。一九四五年初版の、エメ・セゼールによる卓越したエッセイ『詩と認識』を導き手としよう。「詩的認識は、科学的な知の偉大なる沈黙のなかに生まれた」という素朴だが挑発的な主張を冒頭に掲げ、彼は、なぜ詩が、世界の危機を乗り越えて進むのに必要とされる知を獲得する唯一の方法なのかを説明している。「詩をつかさどるのは、最高に聡明な知性ではなく、極めて鋭敏な感性やもつとも敏感な感覚でもなくて、経験の総体である」と書いているのである。これがすべてを、すべての歴史を、すべての未来を、すべての夢を、植物から動物にいたるすべての生命形態を、すべての創造的衝動——無意識の深淵から湧き上がってくる——を意味している。したがって詩は、うわっただけの「詩的な文章」というようなものではなく、反乱である。つまりそれは、夜中の叫びであり、言語からの、古い思考方法からの解放である。詩的認識に坎するセゼールの第三の

主張をみてみよう。「詩的認識とは、目標に対し、みずから結集させた富のすべてを浴びせることだ」。

闘争と生きられた経験の詩学のなかに、普通の人びとの発言のなかに、社会運動の文化的産物のなかに、そして活動家たちの考えのなかに、未来についての、つまりまだ生まれていない世界についての認

(23) 奴隷制廃止への南部白人の反動に基づく社会と政治の保守化。

(24) W. E. B. DuBois (一八六八—一九六三) 哲学者、教育者、社会活動家。後の黒人にもつとも影響を与えた黒人知識人の一人で、彼の『黒人のたましい』(一九〇三)中の「二〇世紀の問題はカラーラインの問題である」という言葉が有名。いまま残る全国黒人地位向上協会(N.A.A.C.P.)の創設にも関わる。晩年は共産党に入党し、ガーナのエンクルマ大統領の招聘によってガーナ市民となった。

(25) Franz Boas (一八五八—一九四二) アメリカの人類学者。

(26) Oliver Cromwell Cox (一九〇一—一九七四) 西インド諸島トリニダートの首都ポートオブスペイン生まれの黒人で、シカゴ学派の社会学者のひとり。中流の家庭に生まれ、アメリカで大学教育を受ける。脊髄性小児麻痺によって生涯車椅子で過ごす、その後もアメリカで経済学の修士号、社会学の博士号を取得し、厳しい教育者、マルクス主義者として知られた。

(27) Sarah Moore Grimké (一七九二—一八七三) Angelina Emily Grimké (一八〇五—一八七九) クエイカー教徒で、奴隷制廃止論者。ノースカロライナで生まれ育ち、特に姉は自分の家族の所有するプランテーションにおける奴隷の惨状をみて、奴隷制廃止に目覚める。北部を回って、自らの経験をもとに、奴隷制廃止の講演を行った。

(28) Anna Julia Cooper (一八五六一—一九六四) 黒人女性教育者。奴隷の母親と奴隷主の父親から生まれ、小さいころから教育を受けた。夫の死後には修士号まで取得し、高校教師、校長を歴任。六六歳のころワシントンDCに勤労黒人青年のための大学を設立した。

(29) Audre Lorde (一九三四—一九九二) 黒人女性詩人。大学教授も勤めた。

知地図を、わたしたちは発見する。だが社会運動の詩を、とりわけ新しい世界を夢見るような詩を取り戻すことは、そんなにやさしい仕事ではない。いくつもの明白な理由で、わたしたちが敵とするものが、わたしたちがめざしているものを圧倒するということがあるが、それはいつもっと複雑で曖昧な問題である。反対勢力があまりに頻繁に取り込まれること、夢をはっきり表明したり実現したりするための「自由な空間」を見いだそうとする努力があまりにも稀でありにも周縁化されていること、こうしたことは、抑圧の遺制が生きていることを証し立てている。ジョージ・リプシッツは、『危険な岐路』のなかで次のように書いて、この問題を説明してくれている。「存在している諸矛盾の外側に立つのではなくそれらを乗り越えたいという欲望が表明するのは、革命的な変化より改良主義的改革を選択する、ということではなく、全体主義的な支配システムの外部に立つのが不可能なことを認識している、ということだ」。そのうえ、たとえ新しい世界についての夢を寄せ集めることができたとしても、市場に支配された文化のなかでそれらの夢をどのように理解したらいいのだろうか？ 実際のところ社会運動は参加者の欲望や夢をどのように作り変えうるのだろうか？

もちろんもうひとつの問題は、こうやって夢見ることが、ただ敵によってだけでなく、社会運動の指導者そのものによってしばしば抑圧され、取り締まられるということだ。男性のナシヨナリストやいわゆる社会主義者のユートピア的ヴィジョンはたいがい、女性、若者、ゲイとレズビアン、有色の人びとの抑圧に依存している。欲望はいわゆる革命的イデオロギーに踏みつけにされる。自称左翼たちが「労働者階級文化」の普遍化について話しているのを何度聞いたか分からない。彼らはたとえ歓喜^{エキスタシー}といったことにはまったく関心を示すことなく、自分らが向上と考え、政治的に正しいと考えていることばかり話題にするのだ。わたしはヴァーモントで開かれた社会主義の未来に関する学会に参加したのを

覚えている。そこでわたしたちの仲間は、年配世代の白人左翼たちと大喧嘩した。というのも、彼らは、劣化した「ポップ」ミュージックにとつて代わるべきは、フィル・オクス、ウディ・ガスリー⁽³⁰⁾、エレクトリック化する前のボブ・ディラン⁽³¹⁾、そしてスペイン内戦から生まれた歌だと提唱したからだ。そこにいたわたしはありったけの大声でおどけて叫んだ。「よしてくれよ！ 革命の後だつてまだブーツ⁽³²⁾がいいに決まってる！ そうさ、ブーツがいいんだ！ ファンクが必要なんだよ！」

ときどきわたしは、だれにでも手の届くつかのまの快楽はもろんのこと、日常生活、日々の抑圧、生存といった状況が、わたしたちの想像力を鈍らせていると考える。いつもわたしたちは火を消してまわり、緊急事態に条件反射し、一時的避難所を探し求めているが、そういつたすべてのことのせいで、いまのことしか考えられない。偉大なる詩人ケオラペッツェ・グゴシツイレ⁽³³⁾が詠っているように、「雲が晴れるとき／空の色を知るだろう」。運動が雲を掃えないでいたとき、空の色を想像し、社会運動が生み出しうるある種の夢や未来をうまく表現してきたのは、詩人たち——媒体はなんであれ——だつ

(30) Philip David Ochs (一九四〇—一九七六) 六〇年代のプロテスト・シンガーとして名を馳せた。Woody Guthrie (一九一—一九六七) ポブ・ディランに大きな影響を与えたフォーク歌手。

(31) Bob Dylan (一九四一—) ベトナム戦争、公民権運動の時代のなかで聴かれ、また歌われたプロテスト・シンガーとみなされてこる。

(32) William "Bootsy" Collins (一九五一—) 黒人の天才ベーシスト。ジェームス・ブラウンのバンドに参加したり、一時、ジョージ・クリントンのバンド、ファンカデリックにも参加したりしたあと、ソロでいくつものファンクのアルバムを出してこる。

(33) Keorapetse Kgotsitsile (一九三八—) ヨハネスブルグ生まれの黒人詩人。

た。空の色がわかるというのは、雲の数を数えるよりもいっそう重要である。あるいは別の言い方をするならば、もつともラディカルな芸術というのは、プロテスト・アートなどではなく、わたしたちをほかの場所へと連れて行き、ほかの見方を、ひよつとしたらほかの感じ方を、想像させてくれるような作品である。これは、詩人アスキア・ムハマド・トゥーレが『解放』誌に掲載された一九六四年の論文で、黒人のリズム・アンド・ブルースのアーティストを「詩人哲学者」と呼び、その音楽を「黒人の自由闘争における有力な武器」と述べたとき言おうとしていたことである。トゥーレにとって「運動」は、食堂でのシットインや有権者登録やフリーダム・ライド以上のものだった。それは自己変容にかかわることであり、考え方、生き方、愛し方、苦しみへの対処の仕方を変えることだったのだ。たびたび音楽は、広範な文化状況を悲観的に映し出したが、にもかかわらず、コミュニティの誇りを生み出すことを促し、人種的な自己憎悪に挑戦し、自尊心を確立させたのである。音楽は快樂の世界を創造したが、それはただ資本主義や家父長制や白人優越主義という日々の蛮行から逃避するというだけでなく、コミュニティを建設し、仲間関係をつくりだし、遊び、笑い、違う生き方、違う聞き方を可能にする種を蒔くためのものだった。アミリ・バラカがその有名なエッセイ「変ってゆく同じもの」で述べたように、黒人音楽は愛を基盤にした新しい未来への先導役を務める潜在力を持っている。「愛への変化、愛への（愛の）自由」⁽³⁶⁾を。

自由と愛は、わたしたちのためになる、もつとも革命的な考え方もしれないが、それでいて知識人としてのわたしたちは、その政治的、分析的な重要性を把握するのにもじめなくらいに失敗してきた。ラディカルな社会運動について書くのに一五年も費やしておきながら、わたしには、不当に傷つけられた人びとの集いを活気づけ、刺激し、結びつけてきたのが何であつたかわかりはじめたところである。

ある。ひとたびラディカルな社会運動の皮を剥いでその本質をむき出しにし、動きつつある人びとの集合的欲望を理解すれば、問題のまさに核心にあるのは自由と愛だということが認識できるようになってきた。それどころか、自由と愛は精神性の基盤を構成していると極言することもできたかもしれない。それはつかみどころがなくて不可解な力で、ほとんどの社会運動研究者には捉えることができないものであるのにもかかわらず、である。こういった洞察は、わたしが研究してきた運動のなかにいつも存在していたが、わたしにはそれを見ることが、認めることも、あるいは表面化させることもできなかった。この小著がひとつの始まりとなることを願う。

(34) Askia Muhammad Toure (一九三八—) 一九六〇年代から七〇年代の黒人のアート・ムーブメント創設者のひとり。

詩人でもあり、活動家でもある。オフィシャルウェブサイトを <http://www.askiatoure.com/>

(35) 合衆国南部は二〇世紀半ばまで公共施設などあらゆる場所が黒人用、白人用と分けられていた。南部の食堂などで黒人に給仕しないことに抗議し、学生たちが食堂のカウンターに座り続けた抗議行動はシットインと呼ばれ、これがティーンなどの座り込みの運動へと広がっていった。また合衆国では、選挙前に有権者登録をしないと選挙資格が得られないため、南部の公民権運動は当初黒人の有権者登録に力を入れていた。

(36) リロイ・ジョーンズ『ブラック・ミュージック』木島始、井上謙治訳、晶文社、一九六九年、二八四頁。